



セッションI—5

2月26日(土) 13:00~14:00

“コロナ禍で会えない家族や友人に「手紙を書きたい！」” 右延髄背外側梗塞により Lateropulsion を呈した症例～座位への介入～

長山聰子、鎌倉航平、石川翔太郎 (PT)、野口奈菜、國友温子

1) 医療法人新松田会 愛宕病院 リハビリテーション部

Key Word : (座位機能)、(Lateropulsion)、体性感覚、運動失調

【はじめに】

Wallenberg 症候群で生じる特異的な姿勢定位障害に Lateropulsion (LP) がある。また LP は視覚的垂直定位 (SVV) の偏倚を伴うとされている。今回重度 LP を呈し右側へ傾斜した座位姿勢であった症例に対し、接觸による感覚入力を用いた課題を実施した。その結果、座位機能が改善し、症例の希望である家族や友人に「手紙を書きたい」という合意目標の達成と ADL の向上を認めたため報告する。

【症例紹介及び初期評価】

症例は右延髄背外側の脳梗塞により Wallenberg 症候群を呈した 80 歳代の女性である。既往歴に左凸の側弯症がある。なお発表に対し同意を得た。発症 6 週後の身体機能は BRS は上下肢・手指共に VI, 臨床的体幹機能評価 (FACT) は 1 点, STEF は右 79 点 / 左 88 点, SARA は 25.5 点, LP の重症度分類は grade IV (頭部と体幹が傾斜し開眼でも転倒する) で、運動麻痺はないが上下肢体幹の運動失調と右側への側方突進を認めた。静的座位の特徴として背もたれがあれば 20 ~ 30 分保持可能であった。しかし、右側に傾き不安定であったため両上肢で支持し安定を図っていた。姿勢鏡を用い視覚的に確認させると右側に傾いたところを正中であると誤認していたが、体性感覚に注意を向けさせると「右にこけそうな」と右側への傾きを僅かに認識した。書字は可能であったが、上肢操作が加わると姿勢制御できず、「字にならん」との内省が聞かれた。認知機能は MMSE にて 23 点であった。FIM の運動項目は 14 点で ADL に介助を要し臥床傾向であった。発症前の生活は独居で自立しており、地域の人や家族・友人と話すことが好きだった。また日々の出来事を日記に記載したり、手紙を書いたりして過ごしていた。

【病態解釈】

本症例は、前庭脊髄路・脊髄小脳路・前庭神経核・下小脳路が障害されたことにより Wallenberg 症候群を呈した。脇坂ら (2020) は「LP は視覚で垂直を判断する異常が顕著であり SVV の傾斜が LP の重症度と相関する」と述べている。本症例においても右側に傾斜した座位姿勢であったが視覚による傾きの認識が乏しく SVV の偏倚が考えられた。これらのことから運動失調や LP により姿勢制御が困難であったことが上肢の操作性を低下させていると解釈した。また、既往歴に側弯症があることがさらに正中の誤認を助長させていた。

【治療方略及び経過】

治療目標は垂直性を保った姿勢が可能となり、上肢の操作性が改善する。一定時間座って手紙が書けるようになることを挙げた。方法は SVV の偏倚により視覚情報は利用せず、知覚しやすい触覚や圧覚を用いて「垂直性の再学習」を図ることとした。課題は 8 週目より左側壁面に身体を接觸させることから始めた。さらに肩や骨盤でのスポンジの硬さの比較を求めることで左殿部に荷重し、接觸情報を手がかりに体性感覚に注意を向けるよう促した。自己身体に注意を向けることで徐々に右側への傾きを認識した。10 週目より体幹から四肢を分離し動的座位の安定を図った。壁面に肩を接觸させ垂直性を保った状態で、机上で右手操作を行い少しずつリーチ範囲を拡大した。壁面がない状態でも同様の課題を実施した。時間経過と共に姿勢の崩れを認めたが、自己身体に注意を向けることで修正することが可能となった。

【結果】

発症 12 週後の FACT は 15 点, STEF は右 85 点 / 左 96 点, SARA は 15.5 点, LP の重症度分類は grade II (頭部と体幹が傾斜しバランス障害がみられるが転倒しない) と改善した。体幹機能の改善により上肢の操作性が向上し、書字は「読める字になってきたかね」と自信のある発言へと変化した。座位の特徴として右側への傾きは残存したが、体性感覚を基に姿勢の修正ができ、上肢支持がなくても 1 時間程度の端座位保持が可能となった。認知機能は MMSE は 26 点であった。FIM は 20 点に改善し、リハビリ以外の時間も座って過ごし手紙を書いたり、他患と話をして過ごすようになった。また座位機能が向上したことによりトイレでの排泄が可能となった。

【考察】

阿部 (2013) は「LP に対する介入として残存している体性感覚を利用したトレーニングが有用である」と述べている。今回体性感覚情報を用いた姿勢の修正を行い「垂直性の再学習」を図ったことが、LP の改善に繋がったと考える。また体幹の支持性の向上により上肢の自由度が増し、操作性の改善にも繋がったと考える。コロナ禍で会えない家族や友人に「手紙を書きたい」という思いがモチベーションとなり、意欲的にリハビリに取り組めたことも改善の一因であった。

